

変化する地域ニーズを拾い上げ 島の生活を多様に支え続ける

瀬戸内海に浮かぶ人口約8000人の生口島で、介護事業所など14の施設を展開する社会福祉法人新生福祉会。集いの場や買い物支援サービスを提供するなど、多様な地域活動を展開する。

2024年には地域課題の解決に向けて就労支援や交流スペースを目的としたホテルをオープン。島ならではの魅力的な取り組みも注目されている。

地域の集いの場を提供し ニーズに応じて生活を支援

社会福祉法人新生福祉会が地域貢献活動に本格的に取り組むきっかけとなったのは、2015年の社会福祉法の改正だった。「社会福祉法人は地域に資する取り組みが責務」と明記され、これを機に広島県と尾道市の社会福祉協議会が地域公益活動を全面的にサポートしてくれたのも大きかったという。

最初に始めたのは地域の拠点づくりで、職員宿舎を地域住民が自由に集まって活動する場として提供し

た。2020年には、隣の大三島の

訪問介護事業所の隣にサロン形式の「楽生苑まんなま」をオープン。地域の相談を受け付けると同時に集いの場にもなっており、サロンに来られない高齢者には保健師と社会福祉士の2人が家を訪問し、弁当を届けたり健康チェックを行ったりする取り組みも始めた。

令和5年度の年間相談件数(来所・訪問・電話)は907件で、集いの場(サロン)の利用は延べ1263人と利用者は増加している。相談に因應る形で配食サービスや買い物支援サービスも行うように

なった。

「将来的には、『安心パック』として個々のニーズに応じていくのが目標です。サロンに来て、夕食の弁当がほしい、家に来て健康チェックをしてほしい、一緒に買い物に行ってほしいなど、それぞれのニーズに対応したい」と、同法人で地域公益活動推進委員会の委員長を務める河原大樹さんは話す。

活動を主導する地域公益活動推進委員会は、各事業所から1人ずつと

地域に出ていく大切さを 法人全体で共有する

希望者で構成され、さらに今年度の新卒職員7人も加えた約20人。買い物支援や子ども食堂など担当を決め、業務時間内で活動する。

「普段は重度の高齢者の支援を行っている職員が、町に出てさまざまな高齢者がいることを再認識したり、それによって利用者の声なき声をどう拾えばいいのかを考えたりと、いい刺激を受けているようです」と河原さん。また、委員会のメンバーだけでなく、法人全体の職員にも地域公益活動に関する研修を実施。活動が広がるにつれ、職員の家族が買い物支援や子ども食堂などを利用する

地域に開く、地域とつながる
地域福祉の“核”となる

社会福祉法人新生福祉会

● 広島県尾道市瀬戸田町林1288-6
① takusei.or.jp

1998年設立。1999年、特別養護老人ホーム楽生苑を開設。その後、市内で養護老人ホームやデイサービスセンター、居宅介護支援事業所などの介護施設をはじめ、児童発達支援・放課後等デイサービスなど計14施設を展開する。2022年には東京都足立区に特別養護老人ホーム新田楽生苑をオープン。2024年2月、レンタルキッチンや交流スペースを備え、障害者が働く就労継続支援B型の宿泊施設「ボナプール」を開設



地域公益活動推進委員長の河原大樹さん



理事長の山中康平さん

ケースが増え、職員の意識も変わったという。

「地域公益活動のメリットは、職員が地域に向いていくことで地域の課題がつかめたり、個々の高齢者についても状態が悪くなる前に教えてもらえることです」と、理事長の山中康平さんも話す。何気ない会話から困りごとを知ることでもできるで、雑談しながら人間関係をつくっていくことを大切にしている。

「地域は時代とともに変化していくので、その時々ニーズに対応するのは社会福祉法人の使命です。地域と施設は隔絶された関係になりがちですが、垣根をなくしたいのであれば、自分たちから出ていくのは当然のこと」と山中さん。地域に出ていくことの大切さを、経営者が職員に訴えていくことも必要と強調する。

ホテルをオープンし
町の盛り上げにも貢献

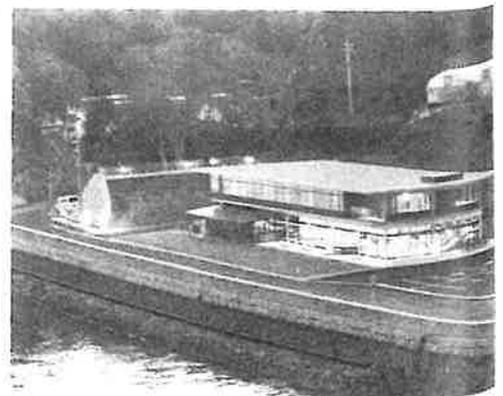
委員会のメンバーが地域の人々の話を聞くうちに、島に足りないものが浮かび上がってきた。①観光客が増加しているのに、ホテルが足りない。②障害のある人が働く場が足りない。③生口島は瀬戸田レモン

などの産地として有名だが、傷のある柑橘類を搾汁する施設や人手が足りない。④地域の人が集う場所が足りない――。

これらの課題を拾い上げてつくったのが、2024年3月にオープンしたホテル「ボナプール楽生苑」だ。ドミトリ、セミダブル、ツインの3タイプの部屋があり、宿泊客の5〜6割は外国人。就労継続支援B型の施設として、障害のある人が掃除やリネンの洗濯、搾汁などの仕事を担当する。1階のフリースペースは地域住民や高齢者、障害者、旅行者で賑わう。地元のニーズに応じて事業を始めたこともあり、ホテルの稼働率は高く、収益化は心配していないという。

さまざまな地域活動を行ううえで課題は、担い手の確保だ。島では畑仕事など役割をもって現役で働いている高齢者が多い。そのため、活動のキーパーソンとなってくれる地域住民を探すのが鍵になるといふ。

また、福祉を学ぶ学生のなかには地域貢献活動に関心をもつ人も一定数いて、各地からインターンシップにやってくる。今年度採用した7人は、すべてインターンだ。地域公益活



「就労支援×宿泊×交流スペース」の施設としてオープンしたボナプール楽生苑。海岸道路に面しており、目の前には青い海が広がる

動は主体が地域住民であることがコンセプトだが、それを動かしていく人を、組織のなかでどう醸成していくかもポイントになりそうだ。

「社会福祉法人として、町を盛り上げたいと常に考えています。今後は、200〜300人くらいの集落単位で、買い物や粗大ごみ出しなどの生活支援をきめ細かく展開していきたい」と山中さんは抱負を語る。

移動支援もやりたいことの一つだという。島では、高齢者の買い物や受診はもちろん、観光客も交通手段が足りなくて困っている。法律の壁などさまざまなハードルはあるが、福祉車両を使って町づくりに貢献できないか、今後も働きかけを続けていく考えだ。